

くすのき

図書館だより 2月号
広島県立三原東高等学校図書館

まだまだ寒い日が続いていますが、春の香りならぬチョコの甘い香りが感じられる季節となりました。暖かい部屋でチョコを片手に読書もいいものですよ？

そこで今回は、図書館からチョコの代わりに、新着図書をお届けします！

♥ 新着図書案内 ♥

「あとには野となれ大和撫子」宮内 悠介

中央アジアの小国で政変が勃発した。大統領は暗殺され、議員は逃走、省庁は機能不全。このままでは周辺の国に侵攻されるか、無法地帯としてテロリストの温床になってしまう。そこで、後宮(ハレム)の若き女性たちが立ち上がった。

自分たちで国家をやろう、と。しかし臨時政権を立ち上げた方がいいが、国内には反政府武装勢力や環境問題、国外には資源を狙う周辺諸国とまさに内憂外患。果たして彼女たちに国家の舵取りができるのか？

舞台となるアラルスタンは架空の国だが、カザフスタンとウズベキスタンに挟まれアラル海に面した場所にあるという設定。半世紀前には世界第4位の面積を誇ったアラル海は、ソビエトの自然改造計画の失敗により5分の1まで縮小。塩害と有毒物質で自然や生活は壊滅的な打撃を受け、20世紀最大の環境破壊と呼ばれている。またこの地域はタジキスタンやチェチェンなど内戦・紛争地域でもある。このポップなエンタメは、紛争と環境破壊の中心で展開されるのだ。後宮の女性たちは紛争地域からの難民や、日系、アフリカ系など多民族で構成されている点に注目してほしい。出自も民族も違う少女たちが共存協力して、軽やかに逆境を笑い飛ばし、跳ね返す。なんと力強い姿であることか！

現実と夢、シビアとロマンの見事な融合がここにある。ダジャレのようなタイトルにも意味あり。今年上半期必読の一冊だ。



「真ん中の子どもたち」温 又柔

台湾人の母と日本人の父の間に生まれ、幼いころから日本で育った琴子は、高校を卒業して、中国語(普通語)を勉強するため留学を決意する。そして上海の語学学校で、同じく台湾×日本のハーフである嘉玲、両親ともに中国人で日本で生まれ育った舜哉と出会う。

「母語」とはなにか、「国境」とはなにか、三人はそれぞれ悩みながら友情を深めていくが、日本、台湾、中国、複数の国の間で、自らのことばを模索する若者たちの姿を鮮やかに描き出す青春小説。



「日の名残り」カズオ・イシグロ

品格ある執事の道を追求し続けてきたステューブンスは、短い旅に出た。美しい田園風景の道すがら様々な思い出がよぎる。長年仕えたダーリントン卿への敬慕、執事の鑑だった亡父、女中頭への淡い想い、二つの大戦の間に邸内で催された重要な外交会議の数々過ぎ去りし思い出は、輝きを増して胸のなかで生き続ける。失われつつある伝統的な英国を描いて世界中で大きな感動を呼んだ英国最高の文学賞、ブッカー賞受賞作。



「影裏」沼田 真佑

大きな崩壊を前に、目に映るものは何か。北緯39度。会社の出向で移り住んだ岩手の地で、ただひとり心を許したのが、同僚の日浅だった。ともに釣りをした日々募る追憶と寂しさ。いつしか疎遠になった男のもう一つの顔に、「あの日」以後、触れることになるのだが。樹々と川の彩りの中に、崩壊の予兆と人知れぬ思いを繊細に描き出す。



「月の満ち欠け」佐藤 正午

東京駅のカフェで初老の男が店員に注文を伝えると、先に着席していた小学生の女の子が「どら焼きのセットにすればいいのに」と言い、かつて3人で食べたよねと畳みかける。

再読すると、少女が初対面の男を知悉していることを強調する冒頭シーンの繊細さに驚かされる。その後の約300頁は、男と読者が抱く「違和感」を解きほぐすことにあてられる。

著者は人生の岐路を主題としてきた作家だ。「記憶」をカギとする本作もその系譜にある。「まさか」と思える出来事に現実味を与えるのは、細やかな生活描写だ。感動の場面は無数にあるが、満月の夜に一人でどら焼きを食べたくなる「究極の愛」の物語だと評するにとどめたい。とにかくラストがすごい。



☆図書館よりお知らせ☆

○図書の返却について

返却期限を過ぎている人は早急に図書室へ本を返しに来てください！

○図書の貸出について

1・2年生への図書の返却は原則2月28日(水)までとします。

